

識子内親王（清和天皇皇女）

皇女研究会

識子内親王は清和天皇の皇女で、生母は更衣、神祇伯藤原良近女である。貞観十八年（八七六）三月十三日、に三歳で親王宣下された。従って、誕生は逆算すると、貞観十六年（八七四）となる。

『三代実録』貞観十八年（八七六）三月十三日条

辛卯十三日。皇子貞數爲親王。年二歳。母更衣參議大宰權帥從三位在原朝臣行平之女也。皇女識子爲内親王。年三歳。母更衣故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也。皇子長頼。賜姓源朝臣。年二歳。母更衣從五位下行信濃權介佐伯宿祢子房之女也。

親王宣下の翌年に伊勢齋宮に卜定された。陽成天皇即位のための齋宮である。陽成天皇の年齢はわずか九歳であつたから、対象となつた皇女は清和天皇の皇女であつた。このとき清和天皇の皇女は全部で五名、一覧を掲げると次の通りである。

皇女名	生母	貞観十九年時点での推定年齢	備考
孟子内親王	藤原諸葛女	六歳ほど	
包子内親王	在原行平女	六歳以下	
敦子内親王	藤原高子		賀茂齋院
識子内親王	藤原良近女	四歳	伊勢齋宮
源戴子	賀茂氏あるいは大野鷹取女か		

敦子内親王は識子と同時期に賀茂齋院に卜定、源戴子は臣籍降下しているため、伊勢齋宮の候補としてはまず孟子、包子、識子の三名が考えられる。貞観十九年時点での年齢は、孟子が長女とすれば六歳ほど、包子はそれと同じか年下となる。識子は年四歳であるから、年齢だけでみれば誰がなつても不思議はない。同時点での外祖父の立場を比較は次の通りである。

貞観十九年（八七七）時点での外祖父の立場
孟子 藤原諸葛 從四位上・左中将
包子 在原行平 參議從三位・太宰權帥・治部卿⁴

識子 藤原良近 故人（從四位下・神祇伯）

藤原良近は『尊卑文脈』によれば、藤原式家宇合の子孫で、淳和天皇に近侍した藤原吉野の子である。吉野は承和の変で左遷され、失意のままに亡くなつた。良近の兄弟はほぼ從五位どまりで、良近の子の高用も從五位下美濃守で終わっている。したがって後見としては識子内親王が最も弱かつたことは明かである。

『三代実録』の藤原良近の卒伝は、良近の全体像と、官歴、そして逸話の三つの部分に大きく分かれている。

『三代実録』貞観十七年九月九日条

神祇伯從四位下兼行美濃權守藤原朝臣良近卒。良近者。大宰員外帥正三位吉野之第四子也。容儀可觀。風望清美。雖無學術。以政理見推。

最初の部分には、良近は風貌は整っており、学はなかつたが「政理見推」つまり政において理をもつて、判断する見識があつたと書かれている。

続いて官歴をみると、刑部大丞、式部小丞から右少弁、左少弁、右中弁、左中弁と弁官を歴任している。貞観四年（八六二）に母の喪に服すも、その服喪期間が終わらないうちに本官に戻されるなど、有能な官吏であつたことが窺われる。

天安二年起家爲刑部大丞。十一月遷爲式部少丞。貞観二年冬授從五位下。三年正月爲伊勢權介。倣裝就路。有詔召還。拜右少弁。四年遭母喪解職。服紀未終。詔以本官起之。五年轉左少弁。八年加從五位上。十年二月爲越前權守。數月復左少弁。十二年轉右中弁。十三年增正五位下。十五年爲土左權守。右中弁如故。十六年轉左中弁。自土左權守。遷兼美濃權守。十七年進爵從四位下。是年八月遷神祇伯。美濃權守如故。

左中弁以上の経験者は參議に昇進し、三位以上に登る道が開かれていた爲、長生きをすれば在原行平のごとく參議に列なつた可能性も見えてくる。しかし、左中弁の後、從四位下に叙せられながらも、神祇伯へと転じている点が氣に掛かる。八月に遷り、九月に亡くなっていることから、急な病などであつたのであろうか。

卒伝の最後には、並外れて力が強かつた逸話も付されている。

良近爲人強力。嘗酣醉乘車而行。戲謂同車者曰。吾欲令此牛不行。乃以手據車床。閉氣堅坐不動。牛張四足。立而不前。其膂力過人如此。卒時年五十三。

良近の逸話としては『伊勢物語』一〇一段に在原行平が良近を正客として家に迎え宴を催したときの話が載せられている。良近を「左中弁」と記しているのので、貞観十六年（八七四）良近が亡くなる前年のことになる。在原行平はすでに貞観十二年（八七〇）正月十三日には正四位下、参議となつていたので、行平の方が官位ともに上である。しかし良近もこのころ右中弁から左中弁に移り、中国、土佐の権守から上国、美濃の権守を拝命するなど、官吏としての道を着実に進めていた。『伊勢物語』では行平の弟、業平が

咲く花のしたにかくるる人おほみ
ありしにまさる藤のかげかも

と栄える藤原北家の恩恵を蒙つて、傍流にすぎない良近までもが在原氏を越えようとする勢いを皮肉つた歌を詠んでいるとされてる。『伊勢物語』がこの歌を載せた真意はともかく、行平と良近という官吏同士の私的な交流の様子をの当たりに見るような貴重な一話である。

識子内親王の伊勢斎宮としての儀式は、貞観十九年（八七七）正月三日に陽成天皇が即位してから滞りなく行われた。

二月十七日に識子内親王、伊勢斎宮に卜定。翌元慶

二年（八七八）八月二十八日に飯宮である雅楽寮を出て、賀茂川で禊を行つて野宮に入つた。伊勢下向は、元慶三年（八七九）九月九日である。葛野河で禊をし、豊楽院で発遣の儀が行われた。陽成天皇はまだ一二歳であつたため、右大臣であつた基経が代行した。この日の重陽の節句は停止されている。

識子内親王を伊勢へ送つていったのは、参議、在原行平である。『伊勢物語』から窺われる行平と良近との親交や、行平の外孫も斎宮候補の一人であつたことなどを考えると、この人事は感慨深いものがある。

識子内親王の伊勢滞在は短いものであつた。父、清和上皇が元慶四年（八八〇）十二月四日に崩御したためである。『三代実録』同年同月七日には識子内親王退下のための行宮造営のことが大和、伊賀、伊勢に下されている。わずか一年程の滞在であつたことになる。凶事の交替であるため、伊賀路を辿つて帰京した。

『三代実録』元慶五年（八八一）正月一五日の記事では同年二月二十二日に伊勢を發つとある。

太政官下符山城摂津等国稱 前伊勢内親王来二月廿二日首途 自大和道、經山城河陽宮、致摂津難波海解除、自彼可入部、凡其供具依例准擬。

退下の行列は二百十九人、大和道を通り、河陽宮を経

て、水路で難波に出、通例通り三所で一日ごとに祓いの儀式を行い、三嶋道を通つて河陽宮に戻ることが示されている。

天慶五年（八八一）正月一九日条

斎内親王、擬出神宮。從河陽宮取水路、赴難波宮。依例三處祓除。每處經一日、即便三嶋道、還向河陽宮。其陪從一百人、檢校奉迎等使六十二人、酒食夫馬等類、事々祇供。時屬諒闇莫用魚鳥。

入京にあつたつての出迎えは六十二人と記されている。諒闇のため、魚鳥などは供さないとの指示も見られる。

識子内親王には同母兄として貞平親王がいる。貞平親王は、貞観十五年（八七三）四月二十一日条に貞古（母橘休蔭女）・貞元（母藤原仲統女）・貞保（母藤原高子）・貞純（母王氏）等五人の皇子とともに親王宣下されており、このとき推定四歳である。したがつて識子内親王より五歳ほど年長の兄ということになる。『日本紀略』によれば延喜十三年三月六日に三品で薨去した。

識子内親王の薨去はそれに先立つこと七年、延喜六年（九〇六）十二月二十八日である。三十三歳であつた。したがつて亡くなるまで同母兄の庇護のもとにあり、前斎宮、内親王としての生涯を全うしたものと考えられる。

亡くなつたときは醍醐天皇の御代であつた。

なお蛇足ではあるが、外祖父良近の子、高用は従五位下美濃守が極官であつた¹⁾。貞平親王の娘は藤原時平の娘褒子の女房、一条の君として『大和物語』一三、三八、四十七に登場する¹²⁾。

注

¹ 拙稿「清和天皇皇女 孟子内親王」『瞿麦』二十九号、平成二十七年三月）

² 拙稿「包子内親王（清和天皇皇女）」『瞿麦』二十七号、平成二十四年十一月）には出生の可能性として貞観十二年（八七〇）以降とするが、孟子が長女とすると、貞観十四年（八七二）以降、貞観一六年（同母弟貞数の出生が貞観一七年であるため）までとなる。

³ 『公卿補任』元慶三年

⁴ 『公卿補任』貞観十九年

⁵ 新潮日本古典文学集成『伊勢物語』

⁶ 『三代実録』元慶元年二月一七日条

⁷ 『三代実録』元慶二年八月二八日条

⁸ 『三代実録』元慶三年九月九日条

⁹ 拙稿「包子内親王（清和天皇皇女）」『瞿麦』二十七号・平成二十四年十一月）

¹⁰ 『日本紀略』延喜六年十二月二十八日条「識子内親

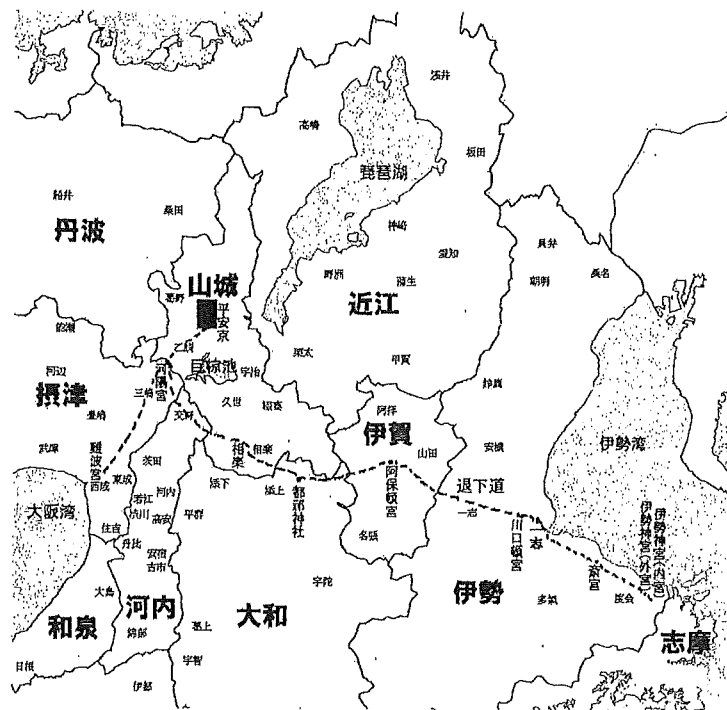
王薨。延喜七年正月一日条「丁卯七年正月一日戊寅。々四刻拜天地四方如常。天皇不受朝賀。以八省修理未成也。又不御紫宸殿。以識子内親王薨。不聞朝政也」

¹¹ 『尊卑文脈』

¹² 新編日本古典文学全集『大和物語』による。

(文責 一文字 昭子)

参考図(作成、一文字)



●史料

※は私の注記、へは割注

▼『尊卑文脈』

齋宮 識子内親王 母右中弁藤原良近女

▼『本朝皇胤紹運録』

識子内親王(齋宮。母右中辨良近女)

▼『帝王編年記』清和天皇の項

皇女識子内親王(母同貞平伊勢齋宮)

陽成天皇の項

齋王識子内親王(清和第四皇女)

▼『一代要記』清和天皇の項

皇女 識子内親王(齋宮天慶元年二月爲伊勢齋同四年退之延長九年正月十三日薨年卅三)

陽成天皇の項

齋宮 識子内親王(清和一女元慶元年卜定)

▼太田亮『皇室御系図』清和天皇

識子内親王(三実)母藤原良近女(三実)。齋宮。延喜六年十二月薨(紀略)

▼『三代実録』

貞觀十八年(八七六)三月十三日

辛卯十三日。皇子貞數爲親王。年二歳。母更衣參議大宰權帥從三位在原朝臣行平之女也。皇女識子爲内親王。年三歳。母更衣故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也。皇子長頼。賜姓源朝臣。年二歳。母更衣從五位下行信濃權介佐伯宿祢子房之女也

元慶元年(八七七)二月十七日

己未十七日。卜定伊勢賀茂齋内親王。伊勢齋識子内親王。賀茂齋敦子内親王並卜食。

元慶元年(八七七)二月廿三日

乙丑廿三日。遣使伊勢大神宮。告以 天皇即位并卜定齋内親王。告文曰。天皇(我)詔旨(止)掛畏(岐)伊勢度會(乃)宇治(乃)五十鈴(乃)河上(乃)下津石根(尔)大宮柱廣知立(天)。高天原(尔)千木高知(天)。天皇御命(乃)稱辭竟奉(流)天照(之)坐皇大神(乃)廣前(尔)申賜(倍止)申(久)。先日(尔)可即位狀(乎)差使(天)令申(太利)。皇大神(乃)厚助(尔)依(天)。天日嗣(乎)平(久)受賜(礼利)。自今以後(毛)皇大神(乃)矜護賜(牟尔)依(天奈毛)。食國(乃)天下(波)愈益(尔)平(久)可有(岐)。又今侍恬子内親王(波)。太上天皇(乃)大神(乃)御杖代(止之天)奉入賜(倍流奈利)。今舊例(乃)隨(尔)

相替〈天〉可令奉仕〈岐〉物〈奈利止〉爲〈天奈毛〉。識子內親王〈平〉卜定〈天〉進入〈流〉。此狀〈平〉王散位從四位下實世王。中臣神祇少副正六位上大中臣朝臣常道等〈平〉差使〈天〉。忌部從八位上齋部宿祢良岑〈加〉弱肩〈尔〉大手繼取掛〈天〉。礼代〈乃〉大幣帛〈平〉持齋〈利〉令捧持〈天〉進〈良久止〉。恐〈美〉恐〈美毛〉申賜〈波久止〉申。

元慶二年（八七八）八月廿日

廿日癸未。任伊勢齋內親王行禊前後次第司式部少輔兼文章博士從五位下菅原朝臣道真爲前次第司長官。判官主典各一人。兵部少輔從五位下兼行伊勢權介平朝臣季長爲後次第司長官。判官主典各一人。

元慶二年（八七八）八月廿六日

廿六日己丑。伊勢齋內親王、欲以明日入野宮。仍於建礼門前、修大祓。

元慶二年（八七八）八月廿八日

廿八日辛卯。伊勢齋內親王、出而雅樂寮飯宮、禊於鴨河、即入野宮。

元慶三年（八七九）七月五日

五日癸巳。授中監物正六位上藤原朝臣最實從五位下、爲

齋宮頭。以正五位下守權左中弁藤原朝臣春景、從五位上行神祇大副大中臣朝臣有本等、并六位六人、任伊勢齋內親王裝束司。

元慶三年（八七九）八月十九日

十九日丙子。任伊勢齋內親王行禊前後次第司。以從五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣道真爲前次第司長官。判官一人、主典一人。從五位上行兵部少輔藤原朝臣時長爲後次第司長官。判官一人、主典一人。以正三位行中納言兼右近衛大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世、參議從三位左衛門督兼美濃守源朝臣能有、宮內卿正四位下源朝臣覺中官大夫從四位下藤原朝臣国經等爲送伊勢齋內親王使。參議從三位行式部卿兼備中守在原朝臣行平、正五位下守權左中弁兼行木工頭藤原朝臣春景、右大史正六位上興道宿祢春宗、中務大丞正六位上藤原朝臣高處、爲長送伊勢齋內親王使。（識子）

元慶三年（八七九）九月三日

三日庚寅。停御齋燒灯之事。矣。伊勢齋內親王可入齋宮也。

元慶三年（八七九）九月八日

八日乙未。大祓於朱雀門前。以明日伊勢齋內親王可進發也。

元慶三年（八七九）九月九日

九日丙申。伊勢齋內親王入齋宮。▼是日。早朝、臨葛野河、以修禊事。即便參入豐樂院。天皇御豐樂殿、令發內親王。天皇喚中臣。神祇大副大中臣朝臣有本稱唯、昇殿跪侍。右大臣代天皇、勅曰。常〈毛〉奉進〈留〉九月神嘗幣帛〈會〉。汝中臣、如常〈久〉申〈天〉奉進〈礼止〉宣。有本稱唯。又勅。今奉進〈留〉齋內親王〈波〉此依恒例〈天〉、三箇年間〈波〉齋清〈天〉天照大神〈乃〉御杖代〈尔〉定〈天〉奉進〈留〉內親王〈會〉。汝中臣、宜〈尔〉吉〈久〉申〈天〉奉進〈礼止〉宣。有本稱唯。降殿退出。是時、天子幼少、右大臣攝政。故行此事。齋內親王駕輿、出朱雀門口門、東向就路、乘輿還宮。』是日、停重陽之節。不賜侍臣菊酒也。

元慶三年（八七九）九月廿日

廿日丁未。送伊勢齋內親王使參議在原朝臣行平復命。

元慶四年（八八〇）十二月七日

七日丙戌。陰陽寮奏言。地震之徵。合慎兵賊飢疫。』下知大和伊賀。伊勢等國。造行宮。以伊勢齋內親王可出宮歸京也。』（中略）▼是夜。酉四刻、奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上栗田山、奉置御骸於水尾山上。帝素服、太政大臣及殿上近臣、清和院上下諸人、皆縞素。百官不須。

依遺詔也。是夜。自戌至子、地二震動。

元慶五年（八八一）正月十五日甲子

十五日甲子。勅、進正二位守太政大臣藤原朝臣基經爵、加從一位。』太政官下符山城摂津等國稱。前伊勢齋內親王（識子）來二月廿二日首途、自大和道、經山城河陽宮、至摂津難波海解除、自彼可入部。凡其供具依例准擬。』除目（云々）。太政大臣家令外從五位下菅原朝臣永津爲主殿權助。惟彥親王爲上野太守、中務卿如故。左近衛權少將正五位下藤原朝臣是比爲但馬守、少將如故。（云々）。

元慶五年（八八一）正月十九日

十九日戊辰。太政大臣抗表（云々）。伏以、今月十五日蒙授從一位（云々）。勅答曰（云々）。宜上奉先皇之聖旨、下叶予一人之惓懷。欽承往命、用斷後章。縱雖も百上、不欲一從。公宜悉之。』下符山城・大和・伊賀・伊勢等國稱。前伊勢齋內親王入京。陪從二百十九人、宜行宮飲食乘馬担夫弁設供給。又下知河内・摂津兩國稱。齋內親王、擬出神宮。從河陽宮取水路、赴難波宮。依例三處祓除。每處經一日、即便三嶋道、還向河陽宮。其陪從一百人、檢校奉迎等使六十二人、酒食夫馬等類、事々祇供。時屬諒闇莫用魚鳥。

▼『日本紀略』

延喜六年（九〇六）十二月二十八日
廿八日。識子內親王（清和皇女）薨。

延喜七年（九〇七）正月一日

丁卯七年正月一日戊寅。々四刻拜天地四方如常。天皇不受朝賀。以八省修理未成也。又不御紫宸殿。以識子內親王薨。不聞朝政也。侍從以上。於宜陽殿行酒餞。巳刻。所司供御藥。